

# 大震災

## The Tohoku Earthquake in Japan

東北大学 工学研究科 応用物理学専攻

藤原 巧

Fujiwara Takumi

あの日から7か月余りが過ぎた。2011年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0という我が国観測史上で最大規模の地震が発生した。この地震による激しい揺れや液状化、そして太平洋側の沿岸部には波高10m以上、最大遡上高40.5mに上る巨大津波が襲いかかり、東北から関東に至る広範な地域に壊滅的な被害をもたらした。さらに、千年に一度といわれ想像をはるかに超えるこの大震災の被害は拡大し、我が国ではこれまでに経験の無い深刻な原発事故が引き起こされている。

仙台市を拠点とする東北大学では、この震災により学生2名と入学予定者1名が命を落とした。その他の被害状況については、関連施設28棟以上の建て替えや実験機器7000台以上の損壊など、被害総額は約770億円と見積もられている(2011年4月15日)。市西部の丘陵地に位置し、理工系の研究棟が集中する青葉山キャンパスも激しい揺れに見舞われ甚大な被害を受けた。

この2日前、3月9日に仙台地域でやや大きな地震があり、ちょうどニューガラスフォーラムの研究会で東京にいた私のところには、研究室から被害なしとの連絡が入っていた。近いうちに必ず起こると言われていた宮城県沖地震のことがチラと頭をよぎったが、それまでも頻繁に起こっていたいわゆるガス抜きで、これでまた当分の間大きな地震は来ないだろうと高をくくり、翌日の研究室恒例行事である蔵王スキー合宿の天気の方が気にかかった。その間も、地球規模の地殻大変動は爆発的な開放の瞬間に向かって刻一刻と進んでいたのである。

3月11日午後、その時が来た。まったく突然に、経験したことの無い激しい揺れが間断なく相当長い時間続き、身動きもままならず冷静にいられる状態ではなかった(夢の中の時間感覚は現実よりずっと遅いというが、実際には2分間程度のこの非日常体験はとてつもなく長い時間に感じられた)。これが、3月11日以前の日常とはすべての環境が一変

する始まりとなった。

震災によって、工学部の5学系のうちで電気・応物系、材料系、建築・環境系の3系のメイン研究棟には損壊による危険建物として立ち入り禁止処置がとられた。私の研究室は電気・応物系本館の高層階（7階）であったことも災いし特に揺れが激しく、ボルト固定などの耐震対策もまったく用をなさないほどで、研究室・実験室の装置類・備品や机イスなどの什器類は何処に何があったかわからないほど原形を留めない有様であった。数日後に状況確認のため恐る恐る入室した際、暗闇の中、懐中電灯を頼りにコンクリートのがれきで土埃の舞う階段を昇り、折からの降雨・降雪による雨漏りで水浸しとなり、荒れ果てて廃墟そのものようになった研究室にたどり着いた時のことが今でも忘れられない。私は、実のところ2004年に発生した新潟中越地震も被災している。今回は高層階のために（当時は4階）、さらに激しい揺れで被害がより大きく、「まさか」、「またか」という思いと同時にたとえようもない深い喪失感に襲われた。建物屋上の検分では、搭屋の主柱が損壊し鉄骨がむき出して傾いており、今にも余震で崩れ落ちるのではないかという恐怖心を抱いた。この状景写真は、後に世界的に著名な学術誌にも紹介され東北大の大きな被災を象徴する例として扱われた。建物内部もいたるところで壁や天井が崩れ落ち、梁がひしゃげてエレベータも落下しているなど、想像をはるかに超えるあまりにひどい惨状に言葉もなくただ呆然とするしかなかった。このような状況に巻き込まれながら応用物理学専攻および研究室の学生や教職員には、よくぞ怪我人もなく無事に高層階から避難できたものだとあらためてその僥倖に感謝し安堵した。

自宅に戻れず避難所生活をしいられた在校生・教職員も多数おり、それら関係者の安否確認や卒業・修了生への指示・連絡、その間も繰り返し頻繁に発生する余震や水漏れに対処しながら、貴重品・重要物品の運び出しなど様々な対応に追われ、混乱と不安の中で一月余りが瞬く間に過ぎた。この間、我々は震災によって研究室スペースを失ったため、別棟で比較的被災の小さかった研究室に一時避難して急場をしのぎ、その後、化学・バイオ系のスペースを提供してもらい研究居室と実験室を構えることが出来た。11月にはキャンパス内に大規模に建設された仮設プレハブ校舎に再度の引っ越し予定であり、新棟が建設されるおおよそ2年半後までこの仮住まいは続く。

このように想像をはるかに超える未曾有の大災害は、同時に、いろいろなことに気づかされる機会でもあった。人としての尊厳を失わず、他人を配慮し、冷静で秩序を保ちながら助け合う被災者に対して、海外から寄せられた驚嘆と賞賛には同じ被災者・同胞として救われたような気持ちになった。また、我々の専攻の学生やスタッフが自らも被災しながら、より過酷な状況にある沿岸部の被災地でボランティア活動に汗する姿に平時にはない共感と感動を覚えた。この国は太古から大地震をはじめ様々な自然災害に遭遇し、その都度、多くの犠牲を払いながら互いに助け合い協力し合って困難を乗り越えてきた歴史を持つ。この日本人の特質が脈々と受け継がれ、今またその原点が試されたのかもしれないと

思うと、このような大震災を経験しながらなお、この国に生まれてよかったと思えることに心から感謝したい。

本学教職員の一丸となった取り組みと迅速な対応により、5月には一月遅れで新学期が開始され、学生たちでキャンパスに活気も戻り教育活動の復旧は順調に進んだ。また、立入禁止建物のなかにあり修理・稼働できなかった大型の実験装置なども順次搬出され、一時的な停滞を余儀なくされた研究活動も急速に復旧しつつある。我々は、新生・東北大学、新生・応用物理学専攻の建設に向かって着実に歩み始めている。この大震災は多くのものを我々から奪い、環境は様々に一変したが、人と人の力は残った。震災直後に感じた、一瞬にしてすべてを失くし現実として到底受け入れがたい虚無感を思い起こすと今でも憂鬱な気分がありありとよみがえるが、この震災前とは断絶された非日常において、若手教員や学生たちが自分に何ができるかを考え、仲間同士で力を合わせ作り上げて行く前向きで力強い様子に、希望は確かにあると大いに励まされ勇気付けられる。被災した逆境の中で学び、成長して行く彼らは、たとえいかなる困難があろうとも果敢に立ち向かい、未来を開拓するたくましい研究者・技術者としてこれからの社会に必ずや貢献してくれるだろう。大切なものを失ってはいないのである。

最後に、ご支援・ご協力、そしてお見舞いや温かな励ましをいただいた皆様に心より御礼を申し上げたい。